∞∞

ニュースレター「がん１１０番」第43号 **2010.11.20**

NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

∞∞

平和公園の近くの大イチョウの木は今年もたくさんのイチョウの実を落としてくれて、旬の味を楽しみにしている市民を喜ばしてくれました。
朝夕は冷え込む日も増え、暑かった夏が懐かしい今日この頃です。NPO法人がん患者支援ネットワークひろしまの会員の皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか？
ニュースレター「がん 110 番」第 43 号をお送りします。今号では、理事の高野さんが、９月 13 日に開催された今年度の「第１回がん患者支援部会」の会議報告をしてくださいました。また常連投稿者である井上会員の図書紹介は、いつもながらとても読み応えがありました。
その他の情報もお楽しみください。

理事長　廣川　裕

●　平成22年度「第1回がん患者支援部会」の報告

９月 13 日に今年度の「第１回がん患者支援部会」が開催されました。会議の概要を報告します。

ご存知のように広島県ではがん対策推進計画を策定するに当たり、「広島県がん対策推進協議会」が設置されました。この会議の下部組織として４つの部会があり、「がん患者支援部会」はその一つです。（「がん対策推進協議会」の模様は前号で井上副理事長が報告されました。）
会議でははじめに事務局から、広島県がん対策推進計画（アクションプラン）の進捗状況についての報告がありましたが、全体的には平成２４年度中の目標の達成は厳しい現状です。

今回の会議では、患者必携の「地域の療養情報」の冊子の作成の検討でした。
今やIT時代ですから、がん情報はパソコンを使ってインターネットから取るのが常識という風潮がありますが、そういう環境に無い方にも「冊子」（紙媒体）として配布しようという狙いです。
国立がん研究センターで、関連の４種類の冊子を作成することになりましたが，このうちの「地域の療養情報」については各都道府県に作成が委ねられました。
「患者必携」は、がんと診断された患者の思いに寄り添い、支えることをめざして「信頼できる情報をわかりやすく、役に立つもの」がテーマです。

（4 ページに続く）

●　新連載　続・「がん」から身を守るために！

続・第３回　子宮がんの話

「続・がんから身を守るために!!」では、やや頻度が少ないがんを取り上げていますが、第 3 回では「子宮がん」の話題をお伝えします。
もちろん「子宮がん」は女性だけのがんですが、この記事を読まれる女性だけではなく、読者の男性諸氏にも、最愛の女性のからだにおこる重大な変化である「子宮がん」についての正確な知識を持たれ、「子宮がん」のリスクから大切な方を守っていただきたいと思います。

（2 ページに続く）

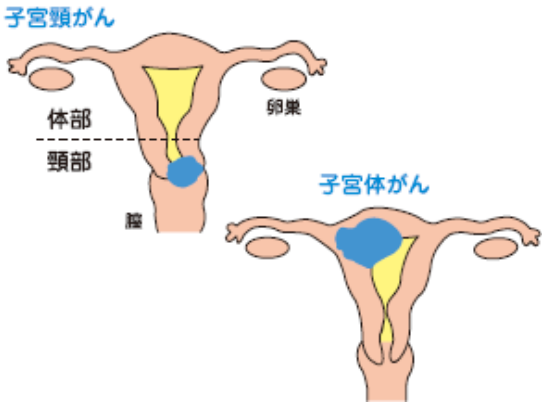
●新連載　続・「がん」から身を守るために！

続・第３回　子宮がんの話

（1 ページからの続き）

■２種類の子宮がん

子宮がんとは言っても、がんが発生する場所によって子宮頸がんと子宮体がんという 2 種類の異なるがんがあります。子宮頸がんは、子宮の入口（外子宮口）に発生するがんで、子宮がんの約 60%を占めています。一方の子宮体がんは、赤ちゃんを育てる子宮の中心部（子宮内膜）に発生するがんで、子宮内膜がんとも呼ばれています。



子宮頸がんによる死亡率が減少する一方で、子宮体がんは最近急激に増えています。以前は子宮がんの 85%以上は子宮頸がんと言われていましたが、最近では体がんの比率がじわじわと増加しており、その重要度が高まってきています。

■子宮頸がんについて

子宮の入口にできる子宮頸がんは、普通の婦人科の診察で発見しやすいので、早期発見が容易です。性交渉によるヒトパピローマウィルス（HPV）感染が子宮頸がんの発病に重要な関連があり、低年齢での初交、性的パートナーが多い、多産などが、子宮頸がんの高リスクとして知られています。

HPV に感染しても多くの場合は、免疫力によってウイルスが体内から排除されますので、子宮頸がんになることはありませんが、ウイルスを排除できずに感染状態が長引くと、10 年以上をかけて子宮頸がんに進行する可能性があります。

近年、子宮頸がんの死亡率は著しく減少している一方で、30 歳代での死亡率や 20 歳代での上皮内がん発症率の増加が見られるようになり、新たな問題となっています。

このような背景から、2004 年からは国が定める子宮がん検診の開始対象者年齢が、従来の 30 歳から 20 歳へ引き下げられました。

子宮頸がんの予防の切り札として、HPV に対する予防ワクチンが開発され、すでに世界で使われ始めており、わが国でも昨年末から使用できるようになりました。

■子宮体がんについて

子宮体がんは性交渉とは関係がなく、女性ホルモンと関連が深いがんで、妊娠経験のない人や排卵障害のあった人、また肥満や糖尿病、高血圧の人も子宮体部がんになりやすい傾向があると指摘されています。

子宮体がんは、子宮の内側より発生するので、子宮頸がんに比べて発見されにくく、自覚症状が出た時には、症状は進行していたといったケースが多いのが現状です。通常の子宮がん検診に行われている子宮頸がんの細胞診テストでは子宮体がんは見つけられません。

子宮体がんの細胞診検査では、細い器具を腟から子宮の中に入れて子宮内膜の細胞を採取して細胞を調べる必要があります。検査には多少の痛みを伴い、数日間痛みが続いたり出血するといった恐れもあり、一般検診で行われることは少ない方法です。不正出血などの症状が出てから医師の判断で行われるケースが多いようです。

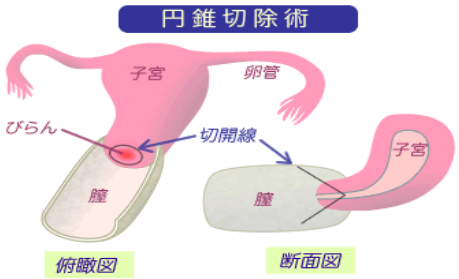
■子宮がんの画像診断

超音波検査法（エコー検査）は放射線被ばくがなく、痛みもありません。リアルタイムで検査可能で、婦人科では第一選択の画像診断法です。子宮がん検診では分からない子宮筋腫や卵巣腫瘍などの診断にも有用です。

CT 検査は検査時間が短く、一度に広範囲の精細な画像が得られます。ただし組織のコントラス

トが不良で MRI のように子宮や卵巣の詳細な内部構造を観察することができません。
MRI 検査は骨盤内の解剖や機能・形態的変化を被ばくなどの侵襲なく良好に描出します。婦人科領域では腹部エコーで異常を指摘された場合の次の検査として、MRI が多く行われています。とくに造影剤を注射した直後の MRI 画像が、子宮がんの描出には優れています。
PET-CT 検査は、子宮がんの原発巣診断に有用ですが、リンパ節転移や他の臓器への転移の診断にその圧倒的な効力を発揮します。

■子宮がんの手術方法
初期の子宮がんが発見された場合、各種の手術法や放射線治療法が選択肢となりますが、若年化が著しい状況の中で、妊娠機能温存も重要な治療目標となります。
円錐切除術は、子宮頸部を円錐状に切除する方法で、腟からメスを使って切除する方法もありますが、レーザーや高周波の電気メスで円錐切除を行うことも多くなっています。Ⅰa 期までの早期がんで、とくに将来的に妊娠を希望する場合に可能な治療法です。



円錐切除術では麻酔と入院管理が必要で、2cm を超える切除では妊娠・早産に影響するとの報告もありますが、子宮頸部の表面だけをレーザーで蒸散する方法（レーザー蒸散術）は麻酔の必要がなく外来手術が可能であり、手術後もいつも通りの社会生活ができ、妊娠・出産への影響がほとんどないという大きなメリットがあります。ただし、この方法の適応はごく初期の子宮頸がんや異型上皮の治療に限られます。

■子宮がんの放射線治療
リニアックと呼ばれる放射線治療装置を用いて、治療用Ｘ線を照射して子宮がんの原発巣とリンパ節転移を攻撃します。体の外からがんにむけて放射線を照射する方法（外照射）と腟と子宮の内部に挿入した放射線源から放射線を照射する方法（小線源治療）という方法があります。
この両者を組み合わせて治療するのが標準的ですが、さらに状況によっては抗がん剤と放射線とを併用して局所のがんを治療していくこともあります（化学放射線療法）。
最近では、強度変調放射線治療（IMRT）、画像誘導放射線治療（IGRT）などのいわゆる「ピンポイント照射」の技術を使った高精度放射線治療が、がんに対する治療効果を高めて、健康な組織臓器の後遺症を軽減する最先端の治療法として期待されています。

理事長　廣川　裕

● 在宅医のつぶやき　６．過去を振り返って、自分なりの対処方法を思い出してみましょう

今回も、前回に引き続きストレスの対処方法についてお話していこうと思います。

６．過去を振り返って、自分なりの対処方法を思い出してみましょう。
不安や葛藤で気持のコントロールが難しい場合には、過去を振り返ってみて、辛い出来事に対して自分がどのように対処したかを思い出してみましょう。「仕事や趣味に打ち込んでみる」「気分転換をする」「信頼のおける人に相談してみる」など、それぞれの人に合った対処法を皆さん持っておられることと思います。気持を落ち着かせて、自分の経験をよく思い起こしてみてください。きっと自分に合った方法が見つかることと思います。
（次回に続きます。）

理事　田村裕幸

●Dr.津谷のコーナー「肺がんで死なないために」

11 月 3 日から 2 日間、広島の国際会議場で日本肺癌学会総会が開かれました。

今回は広島大学医学部病理学教室の井内康輝教授を会長として日本におけるがん死の第 1 位を占める肺癌の、予防・診断・治療と、肺がんの基礎的研究成果の臨床的応用を検証し、基礎と臨床の効果的な統合を如何に図るかを主たるテーマとして開催されました。

11 月 5 日には、肺癌学会と広島県医師会、中国新聞の主催で肺がんの予防と治療の最前線とのテーマで市民公開講座が開かれました。この市民講座に参加された方もおられると思いますが、簡単に報告しておきましょう。

参加者は日本対がん協会会長、国立がん研究センター名誉総長の垣添忠生先生による “肺がんで死なないために”と題して基調講演がありました。検診、禁煙の重要性を強調されていました。パネルディスカッションでは広島を代表する先生方からそれぞれの専門の立場からの講演がつづきました。特別発言では中国新聞社論説副主幹の山内雅弥氏が、患者サイドからの立場での発言があり、そのなかで国立がん研究センターがまとめた、“がんになったら手にとるガイド”を紹介されました。まだ冊子にはなっていませんが、以下の web で全文ダウンロードできます。

http://ganjoho.ncc.go.jp/public/qa_links/hikkei/hikkei01.html

非常に内容の濃いガイドになっています。目次を紹介しますが、がんになる前にも一読をおすすめします。

副理事長　津谷隆史

● 平成22年度「第1回がん患者支援部会」の報告

（1 ページからの続き）

配布予定の「患者必携」冊子

①がんになったら手にとるガイド	がんの情報をとりまとめた冊子（全 210 頁） 主な内容：診断結果の受け止め方，情報の集め方，がんとの向き合い方，治療費，治療法，用語解説，体験者の手記等
②各種がんの療養情報	部位ごとのがん療養情報の冊子（胃，大腸，乳，肝細胞，肺，血液・リンパ，小児，食道，胆道・膵臓，子宮・卵巣，腎臓・尿管・膀胱，前立腺，頭頸部，脳，骨・軟部組織，皮膚の全 16 分冊）
③わたしの療養手帳	患者が理解したことや知りたいこと等を書きとめて整理する手帳 主な内容：治療と体調の記録，質問メモ，年間スケジュール等
④地域の療養情報（広島県作成）	**広島県内で、治療や療養生活に役立つ身近な相談窓口などの情報を取りまとめた冊子**

患者必携《地域の療養情報》

（１） 対象‥‥‥がんと診断された患者及びその家族。

（２）位置づけ‥治療や療養生活に役立つ広島県の制度や身近な相談窓口などの情報を一括して掲載。

（３） 冊子‥‥‥国立がんセンター作成の上記表にある①②③の冊子と合わせて利用される前提で作成する。

（４） 構成‥‥‥がん患者及びその家族が抱える３つの思いに対応する、次の３つの観点から構成する。

① 身体的→「医療に関すること」

② 社会的→「医療費・療養生活に関すること」

③ 精神的→「支え合いの場に関すること」

冊子の内容はがん患者支援部会で原案を作成し、そのたたき台をがん患者団体に送って意見を聞くことになっています。117 万円の予算で 1 万部を印刷し、平成 23 年 3 月末は配布される予定です。冊子を手にする機会がありましたら、ぜひ活用いただきたいと思っています。

広島県では現在、「がん検診へ行こうよ」キャンペーンなどで、がん検診を勧めていますが、私たちにできる唯一の治療が「検診」です。

私も前立腺がんを検診で見つけて手術をした一人です。誰に言われるのではなく、一人でも多くの方に検診をしてもらい、早期発見でがんを克服してほしいと願っています。

なお、今月 22 日にに今年度の 2 回目の「がん患者支援部会」が予定されています。

理事　高野　亨

● 一病息災（「笑い」の効用）

“笑う人はボケません”――某新聞の広告ページに載った見出しです。「明るく毎日を過ごすために」ということを主題とした広告記事でした。

そこで、“笑い”というものについていろいろ調べてみました。

その本質については、ベルグソンの哲学的な解釈もありますが、医学的な研究によれば、人は普段から笑う機会が多いと、前向きな判断や行動をとる傾向になったり、人の笑顔を見たり声を聞いたりするだけでも脳が活動するといいます。これは、大脳皮質―大脳辺縁系―脳幹という脳神経系のはたらきが活性化してボケの防止にもつながるわけです。

また、免疫系にもいろいろな変化が現れます。すなわち笑うことによって、血液中に変化が生じ、リンパ球の一種であるナチュラルキラー細胞（ＮＫ細胞）のはたらきが活発となり、免疫能が強くなるといいます。

ご存知のようにナチュラルキラー細胞は、がん細胞を攻撃破壊するはたらきがあり、その強さはがんに対する抵抗力を高めるわけです。さらに、ヘルパーＴ細胞やサプレッサーＴ細胞にも変化がみられ、がんに対して抵抗力を高めたり、同時に膠原病やリウマチなどの自己免疫異常の改善に関与するといわれています。

まあ、難しい理屈は別として、昔から笑いが健康に良いといわれてきたことを考えると、日常の辛いことも、笑い飛ばす余裕をもてればと思います。また、少々の失敗の時でも、一緒に笑いあえる機会をもつことも一法ではないでしょうか。

ここで一息“高笑い”でもして、佳い新年（2011 年）を元気に迎えましょう。

こんなどどいつ（都々逸）をみつけました。

“好きと嫌いが一緒に来れば箒を立てたり倒したり”

理事　　和田 卓郎

●「リレー・フォー・ライフ広島2010」にご協力いただいた皆様へ

リレー・フォー・ライフ(RFL)広島 2010 はお蔭様で、無事に盛会裏に終了致しました。 感謝の思いを込めてご報告させて頂きます。

今年は延べ 2300 人の参加者があり、晴天にも恵まれ素晴らしい内容になりました。広島女学院中学・高校のグランドをご提供頂き、お陰様で非常にコンパクトにまとまった RFL の会場が出来ました。ステージでは非常に沢山の歌、踊り、太鼓、ハーモニカ等の素晴らしい演目が繰り広げられ、講演会場では１２人もの講師の方に非常に充実したがん関連の講演をして頂けました。ブースにおいては、アロマセラピー、リフレクソロジー、血圧測定、患者交流会、絵本の読み聞かせ、子宮がん検診の啓発・展示、思いやりカフェなど沢山の催しが繰り広げられました。今年もルミナリエセレモニーは､RFL のメインとしてがん患者の思いが込められた忘れられないひとこまとなりました。マンモグラフィー検診者が 47 名、献血協力者が 67 名もありました事お礼申し上げます。

私共実行委員は３月末から実行委員会を立ち上げ、昨年に引き続いて充実した RFL 広島を開催に向け頑張ってきました。多くの皆様のご後援、ご協賛、ご協力を頂き、ボランティアで出演して頂いた出演者の皆様、講演の先生方、協力頂いたボランティアの方々、非常に沢山の方のご協力のお陰でこんなに素晴らしい RFL 広島 2010 を開催出来ましたこと、心より感謝申し上げます。来年はできれば、広島県東部で RFL 広島を開催したいと考えています。どうぞ来年もぜひ宜しくご協力お願い申し上げます。

リレー・フォー・ライフ広島 2010 実行委員長 浜中和子

●「市民のためのがん講座」を受講して

私が「市民のためのがん講座」を受講するようになったのは 3 年前です。きっかけは、職場の仲間の誘いでした。初めは「がん」についての知識を深めたい。それを仕事に活かしたいとの思いが強く、参加するたびに肩に力が入り必死にメモを取っていました。しかし、いつの頃からか、講座を終えての帰り道、とても心が満たされている事を感じていました。

それは、何故でしょう。毎回とても熱心に「がん治療」に取り組んでいらっしゃる先生方にお会いできるからだという事が、最近分かってきました。仕事に行き詰まったり、疲れたりしている時、「がん講座」に参加し、先生方の熱い思いを伺い「こんなに素晴らしい先生がいらっしゃる」と、嬉しくなり私もがんろうという気になります。

今回は「肝細胞がん」についてのお話でした。3 年前に他界した私の義父も 10 年間「肝細胞がん」と付き合いました。外科手術を受け再発を繰り返し、エタノールやリザーバーを使った治療などいろいろ試みていただきましたが、5 年を過ぎた頃からは、ほとんど治療らしきものはせず、義父の生命力と主治医、地元のかかりつけ医の先生の日々のフォローにより、自宅で好きな事をしながら過ごしていまし

た。
　本当にほかに治療はなかったのだろうか、もっと家族としてしなければならないことがあったのではないだろうかと、義父の死後すっと胸につかえるものがあった私は、それを、大段先生にお尋ねしてみました。すると。「年齢やその他の条件から最善の方法だったと思います」と、お答えを頂き、その胸のつかえが一気に消え去り、義父は幸せだったに違いないと、そう思うことができました。
　亡くなる３～４日前、私に「幸せか」と聞いてくれました。私も同じ事を聞いていたなら「うん、うん」と言って頷いてくれたと今思います。

　「がん講座」への参加は私に明日への活力を与えていただける素晴らしい機会です。沢山の方がそれを感じていただければと願っています。

ボランティアメンバー　淺井 由美

●「市民のためのがん講座」に思うこと

　今日は広島大学病院の大段秀樹先生の肝臓がんと肝移植についての勉強会。さてさてどんな話をして下さるだろうかと思いをめぐらせ竹原からバスに乗る。
　系統的肝切除と非定型的切除という方法ではブロッコリーを使っての解りやすい説明に、目から鱗。又、活性化肝ＮＫ療法の話には、身体をのり出しワクワクと聞き入った。本当に中身の濃い充実したものでした。ちなみに先月の講義以来、ブロッコリーが肝臓に見えます。

　ボランティアの私にとり、がんについて学ぶという事は、患者さんと思いを共有できる。そして、治療方法は一つではない、日進月歩の情報を一人でも多くの方にお知らせしたいと思っている。先日もある会合で、仕事をしながら色々な患者さんが集うサロンをされている定年間近の看護師さんやパートの看護師さん達の会話で「病院を離れたら、患者さんに新しい情報を教えてあげられんけぇ、病院にへばりついとるんよ。新しい情報が入らんのは、怖いよねぇ」と話されていた。早速「NPO 法人 がん患者支援ネットワークひろしま」の事を紹介させていただいた。この講座は、解りやすく新しい情報が聞ける事。そして最新の高精度放射線治療装置 ノバリスＴＸのことも話した。
　「市民のためのがん講座」は、患者さんやご家族、そして一般市民だけでなく、現場を離れた看護師さんにとっても実に良い情報源ではないだろうか。こんなに素晴らしい先生方から間近で聞くことの出来るスペシャルな講義は、とてもありがたく本当に感謝しています。

ボランティアメンバー　楠窪 恭子

●「カンボジア便り」その５

　カカンボジアの言葉は｢クメール語｣です。もちろん通訳なしには会話ができません。通訳さんはクメールの言葉と日本語を酷使して私たちの手助けをしてくれます。
　カンボジアには日本人が多く関与しています。観光客だけではなく支援関係の人たち（政府関係も NGO も個人レベルでも）も多いですし、現地に住みついている人も。そのためかどうか、日本語学校がいくつかあり、大勢の若者が日本語の勉強をしているのです。

観光産業はカンボジアでは高収入につながるため、目指す人は多いのですが、いつもお世話になるリダさん、ワンナックさんはとても勤勉でまじめな人です。「言語を伝える」だけではなく、我々の活動の意義と目的を十分に把握して、関係各所への連絡なども知らぬ間に進めてくれる仲間です。彼らなくしてはできない活動といっても過言ではありません。

今まで6年間活動して得られたものはとてもたくさんありますが、彼らを含めた多くの方々との「人のつながり」は何事にも代えがたい大きな財産です。この財産をさらに輝かせるために、これからもがんばっていきたいと思います。

理事　藤本 真弓

● 井上さんの書籍紹介

難治がんと闘う　－大阪府立成人病センターの五十年－」
足立 倫行　著
新潮新書　2010年8月初版

はじめに

『近年、「がんとの共生」という考え方が一般に浸透しつつある。それは決して悪いことではない。私も緩和ケアなどに深い関心をもっている。だが、がんを治せるものならば治したいという思いもまた、医師と患者に共通の切実で根源的な願いである。

がんの治療技術は日進月歩で、毎月のように新薬や医療機器が開発され、新しい治療法が報告されている。しかし、まるで人間の必死の追跡をあざ笑うかのように、がんはさまざまに変化し、したたかに人間に襲いかかる、実に恐ろしい病魔である。けれど、がん専門医たちは、そんな厄介な敵に敢然と闘いを挑み続けている。』－本書より－

ところで、皆さんは「国内トップクラスのがん専門病院」と聞いて、どこの病院を思い浮かべられるのだろうか。まず、築地の「国立がん研究センター」、次に同じく東京の「癌研有明病院」が一般的と思われる。私もその一人で、本書に出会うまで、「大阪府立成人病センター」について知らなかった。実は、約10年前、同センターに私の専門であった心臓病の研究のことで相談に行ったことはあるのだが。昭和34年、開設以来、一貫してがんを専門にし、がんと闘い続けている病院なのである。

著者の紹介

1948(昭和 23)年生まれ。ノンフィクション作家。主著に「人、旅に暮らす」「北里大学病院 24時」「日本海のイカ」「森林ニッポン」などがある。

本書の内容・感想

本書は、9章からなり、1章で1人の医師が紹介されている。どの章からも医師の情熱が伝わってくる。私もこの病院での治療が必要となればここで治療を受けたい。また、将来を選べる立場だったら、この病院で仕事をしたい。

9人の医師は皆さん素晴らしいのだが、特に感銘を受けたのは、現在、センター長でもある石川先生である。第三章「膵臓がんに克つ　石川治医師に聞く」より、少し紹介する。なお、ニュースレター41号に廣川先生が書かれているように、膵臓がんは、「がんの王様」といわれることもあり、手術で切除できた場合でも5年生存率は20%前後で難治がんの1つある。ところが、石川先生のグループは、今では、外科手術と放射線治療、化学療法(抗がん剤療法)を組み合わせた集学的治療により、5年生存率50%という世界に誇る実績を挙げられている。

石川先生が膵臓がんと出会われたのは、同センター外科に就職された1976年。当時は、切除できる症例はほとんどなく、手術は1年間に3、4例であった。80年に入り、膵頭十二指腸切除術だけでなく、拡大郭清術も始まり、5 年生存率が、10%から 20%に。だが一方で、肝臓に転移するケ

ースが増えてきた。そこで、『2 チャンネル化学療法』を開発された。これは、肝臓を養っている 2 本の血管、門脈と肝動脈から抗がん剤 5-FU を入れる方法である。肝転移は、50%から 15%に減り、90 年代には、5 年生存率が 30%に達した。すると、今度は、肝転移が抑えられ生き延びる人が増えたため、膵臓への再発が増えた。そこで、2000 年頃から、術前放射線療化学療法を始められた。そして、ジェムザールという新しい抗がん剤が使えるようになった。この薬は、5-FU より膵がんに対し有効で、放射線の感受性を増強させる。このような 30 年余りの臨床研究により、「5 年生存率 50%」という素晴らしい成績が生まれた。今では、T3 ステージだけを対象にしても、5 年生存率 50%である。なお、放射線療化学療法は、現在、世界的に研究が進んでいるが、80 年代に生まれた『2 チャンネル化学療法』は標準療法となっていない。何故ならば、方法がかなり面倒であるからだ。

さらに、「膵がんを早期に発見して治療する」というテーマにも取り組まれている。独自に開発された検査法、手術法により、これまで 20 人の患者さんを治療され、全員が再発なく生存されている。

そして、石川先生の方針は、『常に難治がんにチャレンジすること』。

その他、開設以来、疫学調査を行われている津熊秀明先生。年間肺がんの手術を 230 例行われ、術中迅速切離面洗浄細胞診などの最新技術を駆使されている呼吸器外科の兒玉憲副センター長。新たな診断法の研究に取り組まれている、加藤菊也先生らが紹介されている。また、『とにかくがんから生還しよう！』『どの治療法を選ぶかは、最後は患者さんにお任せして、我々はただひとりひとりを丁寧にきちんと治療して行こう』『我々が挑戦しないで誰がやるんだ』『自分の担当した患者さんとは、最後まできちんと医師として関わる』等、医師としての姿勢も教えてくれ、患者の立場としても頼もしい。

2015 年移転し新しくなる。これが、堀正二センター総長の言葉だ。『がん医療日本一を目指すキーワードは「誇り」です。当センターは、医療スタッフはもちろん、患者さんも誇りを持てる医療機関でありたいと考えています。我々スタッフの側は、「我々は歴史に裏打ちされた高いレベルで最前線の治療を行っている」という自負であり、患者さんは「ここで治療を受けてよかった」という思いです。つまり、双方の質的な「誇り」の充実を、新病院ではよりいっそう追及していきたいと思います。』

本書を通じて、「大阪府立成人病センター」という素晴らしい、誇れる、がん専門病院が西日本にもあることを知っていただきたい。そのことだけで、楽になる。また、医師は、真摯に病気と闘い、患者さんと病気と向き合っていることも知っていただきたい。２人に１人ががんにかかる時代。がんの患者さんもそうでない人も、希望がもらえるであろう。

会員　井上 林太郎

● 広島県内のがん関係イベント情報

○　平成２２年度第４回「市民のためのがん講座（全６回シリーズ）」

日時：2010 年 11 月 27 日（土）午後 2 時～4 時 15 分
場所：広島市中区地域福祉センター（広島市役所向い側「大手町平和ﾋﾞﾙ」５階大会議室）
テーマ：「耳鼻科領域のがん治療について」井口　郁夫先生（広島市民病院耳鼻咽喉科部長）
　　「抗がん剤と放射線治療の併用療法」廣川 裕（広島平和クリニック院長・当会理事長）
受講料：当会会員：800 円、協力団体会員：1、100 円、一般：1、300 円
連絡先：NPO 法人「がん患者支援ネットワークひろしま」事務局（TEL/FAX 082-249-1033、
　E-mail:info@gan110.rgn.jp）

○　のぞみの会･尾道・講演会
日時：2011 年 1 月 8 日（土）午後 2 時 30 分～4 時 30 分
場所：尾道市総合福祉センター　4 階集団指導室（尾道市門田町 22-5）
演題：「乳がんが再発したら？」池田　雅彦先生（福山市民病院乳腺甲状腺外科総括科長）
参加費：のぞみの会会員無料、一般 500 円
連絡先：のぞみの会・尾道市栗原町 5901-1　浜中和子　TEL:0848-24-2413、FAX:0848-24-2423

○　のぞみの会･広島・講演会
日時：2011 年 1 月 15 日（土）午後 2 時 30 分～4 時 30 分
場所：広島市中区地域福祉センター（広島市役所向い側「大手町平和ﾋﾞﾙ」５階）
演題：「乳がんに関する最新情報」大谷　彰一郎先生（広島市民病院乳腺外科副部長）
参加費：のぞみの会会員無料、一般 500 円
連絡先：のぞみの会・広島　廿日市市四季が丘 3-10-13　桜井征子　TEL&FAX: 0829-39-7213

○　平成２２年度第５回「市民のためのがん講座（全６回シリーズ)」
日時：2011 年 1 月 22 日（土）午後 2 時～4 時 15 分
場所：広島市中区地域福祉センター（広島市役所向い側「大手町平和ﾋﾞﾙ」５階大会議室）
テーマ：「肺がんの診断と治療について」有田　健一先生（広島赤十字・原爆病院内科部長）
　　「肺がん治療と化学放射線治療法」廣川 裕（広島平和クリニック院長・当会理事長）
受講料：当会会員：800 円、協力団体会員：1、100 円、一般：1、300 円
連絡先：NPO 法人「がん患者支援ネットワークひろしま」事務局（TEL/FAX 082-249-1033、
　E-mail:info@gan110.rgn.jp）

●編集後記

前回ようやく夏の終わりを告げたばかりなのに、もう冬。今度は風邪ひきさんがちらほら見られています。なかに、「インフルエンザの予防接種をしたから風邪にはかからない」と誤解されている方がいらっしゃいます。「風邪とインフルエンザは、ばい菌が違うのですよ（注；正確にはばい菌ではなくウイルス)」と言ってますが、皆さんもご用心を！！
今年のニューズレターはこれで最終号です。来年も引き続きよろしくお願いします。(ま)

■ 発行： NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま 事務局
http://www.gan110.rgn.jp
■ お問合わせ： info@gan110.rgn.jp
TEL & FAX：082-249-1033
■ Copyright： NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

このニュースレターは、当会の会員に配付しております。
当会の活動を充実させるため、入会希望者のご紹介をお願いします。